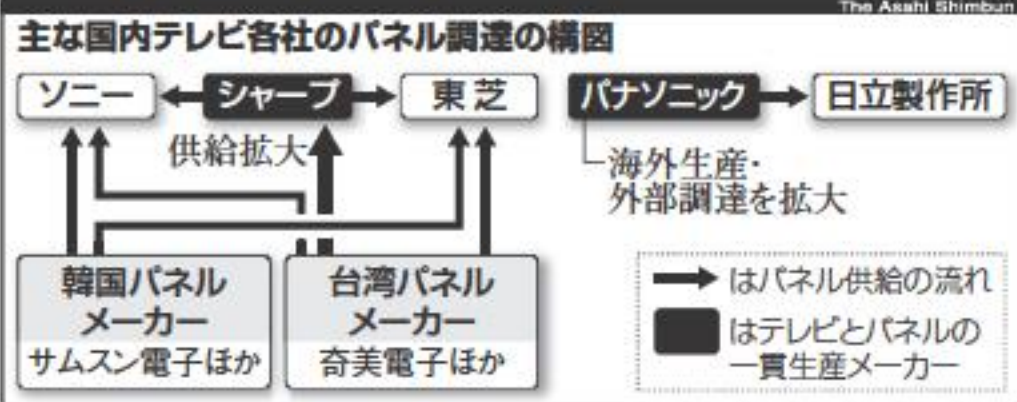


テレビ王国の落日

シャープとパナソニック 国内生産縮小

需要減り価格競争に勝てず

日本のお家芸だったテレビづくりが総崩れになってきた。「2強」の一角をしめるシャープが3日、テレビ向け液晶パネル生産の大幅縮小を表明。パナソニックも外部調達を広げる。技術力の高さで世界を主導してきた日本勢だが、価格競争が激化し、国内生産の新たな収益モデルを描き切れずにいる。



薄型テレビの販売台数で国内トップのシャープが3日開いた経営説明会で、片山幹雄社長は「世界中の誰も欲しがっておらず、作る必要がなくなった」と語った。主力の亀山工場（三重県）で生産してきた30〜40型のテレビ向け液晶パネルの生産縮小についての理由を説明した。

需要の減少が海外勢との価格競争に拍車をかけ、生産するだけ赤字が積み上がるという。このため、国内テレビ生産の象徴だった亀山工場は今後、スマートフォン（多機能携帯電話）などの中小型パネル工場に転

国内の薄型テレビ事業の歴史

1990年代末	薄型テレビ市場立ち上がり
2000年代前半	拡大期
01年	シャープが30型薄型テレビを65万円で発売
04年	シャープの亀山工場稼働、日立製作所、パナソニック、東芝が液晶パネルの共同生産を発表
05年	発売の37型アクオス
2000年代後半	再縮小期
07年	撤退相次ぎ、2強時代に
07年	パナソニック、シャープがそれぞれ関西で新工場建設を発表
2010年代	低迷期?
11年	パナソニックがパネルの外部調達と海外生産の拡大を表明、シャープは亀山工場のテレビ向けパネル生産を大幅縮小

▲今年3月に発売したパナソニックの3Dピエラ

▲6月下旬に売り出す最新の40型アクオス

換。亀山で生産してきたテレビ用パネルは、提携先の台湾メーカーから安く調達する方針を打ち出した。堺工場（大阪府）は60型以上の超大型パネルの生産に特化する。

シャープだけではない。国内生産を拡大してきたパナソニックも4月下旬、兵庫県の主力工場への投資

リーマン・円高響く

もともと、技術力が問われた薄型テレビは、家電メーカーの収益源だった。1990年代末、パソコンなどの中小型が主流の液晶パネルをシャープなどがテレビ向けに大型化。プラ

1990年代末、パソコンの半分を奪う勢いで、04年に最先端技術を採用入れた亀山工場を稼働させ

度まで3年連続の赤字。増強を続けた国内パネル工場に中国に工場設備を移管、液晶パネルは外部調達を加速する。テレビ事業は10年極めて甘かった」と話す。

度まで3年連続の赤字。増強を続けた国内パネル工場に中国に工場設備を移管、液晶パネルは外部調達を加速する。テレビ事業は10年極めて甘かった」と話す。

転機は00年代後半。韓国サムスン電子やLG電子といった海外勢が、安い労働力や積極投資で世界市場を奪った。日本勢はパナソニックとシャープが他社のパネル生産を集約。外販先を増やし、新工場の建設へ動いた。日立製作所はパネル生産から撤退。さらに08年のリーマン・ショックによる需要急減と円高が襲い、黒字基調に持っていけない。実際、東芝はパネル調達も生産も外部に頼る形でなんとか黒字。7期連続でテレビ事業が赤字のソニーも海外からのパネル調達や委託生産の拡大を急ぐ。

調査会社ディスプレイサーチの田村喜男上級副社長は「国境のないテレビ競争はコストがすべて。国内勢は高品質とブランド力でしか勝負できない時代になった」と指摘する。

10年には各社とも3次元（3D）テレビの投入で差別化を目指したが、価格競争

から抜け出せない。中小型と超大型のパネル生産に特化するシャープは、片山社長が「オンリーワン技術をつくって闘いたい」と語る。（大宮司聡、山村哲史）

を計画から約1割減らす方針を明らかにした。代わりに中国に工場設備を移管、液晶パネルは外部調達を加速する。テレビ事業は10年極めて甘かった」と話す。

度まで3年連続の赤字。増強を続けた国内パネル工場に中国に工場設備を移管、液晶パネルは外部調達を加速する。テレビ事業は10年極めて甘かった」と話す。